

## 第4章 座 談 会

### ——出演講師の立場から——

#### < 出 席 者 >

##### 出演講師

岩崎 寛和 (母性の健康科学)  
岡畑 恵雄 (生物有機化学)  
星 薫 (認知心理学)

##### 実験担当

仁科 エミ

##### アンケート担当

瀬田智恵子

##### 制作担当ディレクター

飯森 彬彦 (母性の健康科学)  
井出 定利 (生物有機化学)  
佐多 光昭 (認知心理学)  
松川 正樹 (動物の行動と社会)

##### 司会 佐々木正實

**司会** 年度末のお忙しいところをお集まりいただきありがとうございました。また、この1年間実験にご協力いただいたことにお礼申し上げます。「本番」を利用しての実験ということで先生方にとってはやりにくかったのではないかと、申し訳なく思っております。今日は、この実験の感想を中心に、講座番組の演出についてご意見を伺いたいと思います。

#### (1) 「立ちか座りか」——先生方の感想

**司会** 実験の回数が一番多かったのは、「立ちか座りか」ということでしたが、まず岡畑先生から感想をお聞かせください。

**岡畑** はい、私はこれで出演は2回目になります。私の感じでは立ってやるのも座ってやるのもそれほど差はないと思います。収録中に一番気になりますのは、自分がどう映っているかということです。座ってやる場合にはモニターを見ながらできますので、そういう点では比較的簡単で難しくなかったんですが、立ってやる場合には、動きますので自分がどう映ってるかというのがよくわからないんですね。モニターがどこにあるか、いつも探さなくてはいけないので、その辺で随分とまどったような気がします。

ただし視聴者から見ればやっぱり動いているほうが変化があっていいんじゃないかな、という気がします。

**司会** 星先生はいかがでしょう。

**星** 私は、「立ち・座り」の実験は1回しか経験してません。初回でしたか・・・午前は「立ち」で午後は「座り」でやりました。まず最も感じたのは立ってると疲れるなということでした。教室の中だと動き回るからでしょうか、大して感じないんですが、スタジオでやりますと非常に疲れます。これはとってもやだわ、と思ひまして2回目以降は、全部「座り」にさせていただいたんです。

ただ特殊事情として私の番組は、2人でずっと画面を構成していたということがあります。1人ですとおそらくその場を自由に動き回れるのでしょうけれども、2人の場合、動きが非常に制限されます。ほとんど同じ場所に立ったままで話さなければいけなくなりました。

それから、手元の資料が見にくかったですね。手元の資料が画面に写ってはまずいかなというような気持ちがありまして、資料をあまり見ないようにしましたが、するとやっぱりうまくできなくて……。資料をどのあたりで、どう持って、いつ見ればいいのかということがよくわからなかったんですね。

もうひとつ、じっと立っていなければいけないっていう縛りつけられてるような圧迫感がありまして、非常にくたびれました。座ってる方がまだしも自由度が大きいというのが、最も大きな印象としてありました。ただ、見てる方の感想がどうであるかというのはちょっと私もよくわからないんですが、少なくとも私達の様に複数の出演者で画面を構成しているような場合には、必ずしも「立ち」っていうのはいいスタイルでないような気がいたしました。

**司会** 岩崎先生も「立ち・座り」をやっていただきましたが……。

**岩崎** そうですね。立っている時にカメラを見るというのは必ずしも楽じゃないですね、視線はもう全然あらぬ方向を向いておりましてですね。まず、それがひとつ。それから、疲れるとおっしゃいましたけれども、私は疲れたとは思いません。むしろ、私の場合は姿勢がですね、立ってると悪くなりはいないかと心配でした。これは人によるでしょうね。

**司会** ここにはお見えになっていない先生方のご感想ですが、収録の直後にお伺いしたアンケートの中で目立っているのは、肉体的には立っていると疲れるということです。例えば、「動物の行動と社会」のある先生ですが、「立ち」は疲れるが「座り」の方が緊張度が強い。結論的には「立ち」の方が楽であるというふうにお書きになっていらっしゃいます。「動物の行動と社会」の別の先生は、足腰が立ち続けたから疲れたけれども、立っているほうが気楽にできる、というような感想です。

**担当A** 立って動いて講義をしていれば時間が短く感じられ、疲れを感じないっていうことになりませんか。

**岡畑** 確かに全然問題はないですね。私共が主にやるのは大学の講義と、それからあちこちで講演をしたりします。ほとんどそういう時は立ってやりますが、何ら肉体的な疲れはないですね。講演の場合は1時間とか1時間半ぐらいずっと立ちっぱなしでしゃべることになりますが、それは全然苦にはならないですね。

**司会** アンケートに戻りますが、星先生から出しましたけれども、原稿を置く台を用意してなかったのが、困ったという先生も2～3みうけられます。また、モニターがよく見れなくて困ったと、岩崎先生と同じ感想をあげた先生もありました。本当は、モニターは、アシスタントディレクターが常に先生から見えるように動かさなければいけないんですね。

## (2) 「立ちか座りか」——パターン（図表、写真等）との関係で

**岡畑** パターンの出し方でもね、ちょっと硬直化しすぎてると思います。

**担当A** 硬直化を防ぐということもあったんです「立ち」にするっていうのは。何回も同じパターンを使えますから。

**岩崎** それから、立った時のパターンの指し方ですね。パターンをたくさん並べられると順番をよく覚えていないと、とっさのことですから間違えてしまいますので、ちょっとやりにくい面があった。

**司会** パターンが何枚か同時に出示されているので、どれを使っていいのか、順番がよくわからなくなったということですね。今までのやり方、紙芝居みたいにやった場合には、パターンの順番が確定してしまい、先生が収録中に変えたいと思ってもどうにもならない。もう1回使いたくてもできない。これに対して、全て貼ってあれば、融通がきいて先生にとってはやりやすいのではないかと・・・こんなつもりだったんですが。

**岡畑** おっしゃる通りだと思うんです。ところが今度はカメラがついてこないこともあるんです。なかなか肝心のパターンをアップで撮ってくれないんです。だからいくらたくさん貼ってあっても結局順番通りになってしまいます。僕達にとって楽なのは次のパターンが見えてるというだけの話です。

**担当B** いや、カメラマンは対応できるはずですよ。「ちょっと前に戻ってこちらにいきます」と先生におっしゃって頂ければ・・・。

**岡畑** そしたらカメラはついてこれるんですか。

**担当A** 3台ありますからできるはずですよ。今まで座ってやる形が一番多かったものでアドリブに慣れていないということですね。今後だんだん慣れてくるだろうと思います。あらかじめ技術スタッフに、先生は立った場合はこちらに動くかもしれない、あちらに動くかもしれない、そういうふうに説明しておけば対応してくれるはずですよ。

### (3) 「立ちか座りか」——目線について

**司会** 目線についてはいかがでしたか。

**岡畑** 確かにずっとカメラを見なくちゃいけないっていうのはやっぱりつらいですね。私達が教室で講義する時は、決して生徒の顔ばかり見てる訳じゃないんです。天の方向を見ながら、宙を見ながら、窓を見ながらしゃべってるわけです。決してずっと同じところを見る訳ではありません。

**司会** 立ちの場合、今、先生がおっしゃったように普段教室で話しているのにかなり近い感じで目線を動かしてもおかしくないだろうと思います。

**岡畑** あ、なるほど。立ってやるっていうのはそういう意味だったんですね。

**担当C** 立って講義する時に、黒板のものを説明する場合は非常に自然でいいんですが、黒板とは関係なくストレートで話をしなきゃいけないような場合に、目線をどうするかってことが問題なんですよ。その時にカメラをずっと見てたほうがいいのか、もっと自由にあちこち見れるのかっていうことですね。

### (4) 「立ちか座りか」——「絵柄」と「講師バストショット」をキーワードに

**岩崎** 出来上がった番組を見てみると、横向きでしゃべっているバックに、たくさんのパネル

が映ってるんですね。ああいうのはちょっとかっこうが悪いんじゃないかなという気がしないではないですね。

**担当C** たくさん図表が並んでるのがよくない、引いたサイズが良くないとおっしゃってるんですね。

**岩崎** ええ、そういう意味です。説明するのはどれかひとつのパネルですね。たくさん貼っていると、関係ないパネルまで同時に写ってしまうでしょう。

**担当B** 先生のおっしゃることはよくわかりますが、僕はつめたサイズの画面ではなく、引いた絵が好きですね。しかし、引いた絵を嫌う方もおりまして、すぐにつめた絵にしてしまうんですね。でも、つめた絵ばかりだと息がつまりますね。

**担当D** そういった点を工夫しなければいけないんですけども、問題はやはり1回の番組に入れる情報量が多すぎることからきていると思います。恐らく番組では、教室でやるとしたら2回か3回分位の内容の講義を1回の番組に入れてしまうことが多いと思います。

結局我々が一番迷うのは時間との兼ね合いと戦いです。雑談を入れながらも講義ができるようなそういう40分だともうちょっと引いたサイズとか、緊張感の少ない絵が作れて見る方も楽だろうと思うんです。今のやり方ですと、40分の中でかなり詰めたお話しをして、かなりぎりぎり覚えなければいけないような情報を盛り込んだパターンを出さざるを得ない。したがって、つめたサイズの絵が多くなってしまいます。我々はそういうふうを感じてます。

**岡畑** 僕らが疲れる原因は「立ち」ではなく、あの「画面」なんです。僕はいつも思うんですが、何でそんなに講師を映さなくちゃいけないのか……。あんまり講師は映して欲しくないですね。例えば、僕達が講演する場合には、内容が科学ですので、どうしてもOHPを見せながら講演するわけです。その時聴衆は皆OHPを見てるんですね。放送大学というパターンを見てるわけです。講師の顔はほとんど見てないんです。それなのに、ディレクターは、講師をすごいアップで映したがるんですね。

**瀬田** 放送大学が行った学生を対象にしたアンケートを見たことがあるんですが、選挙演説みたいですね、延々と先生のバストショットが続くのがちょっときついというのがあります。印象に残っています。

**担当A** だから、「立ち」の場合は「先生が横にいて後ろにパターンが見える」……そういう画面にすればいいんでしょうね。わざわざ先生のアップを撮らなくても。

**岡畑** そのときにね、さきほどご意見がありましたように、パターンが6つも7つもわーっと映るのはやっぱり困りますね。スライドを映す時とか、OHPを映す時と同じような感じで、1枚1枚撮るようにすればいいんです。

**司会** パターンを並べるやり方に美術館方式という名前をつけました。美術館に行けば絵がたくさん飾ってありますが、ごちゃごちゃとでなくてひとつひとつ離して飾ってますね、そんな感じでパターンを飾れば問題は解決すると思います。先生が使いたいパターンのところまで歩いて行くことになります。この場合かなりのスペースが必要になってきますけれども……。

**岡畑** そうですね、離して貼ってあれば、ぐっと引いても後ろにパターンがわっと10枚も並ん

でるってことがなくなりますね。

あのパターンの大きさっていうのは、多分座る時の大きさだと思いますね。立つ時は、実はこういう非常に大きな1 m×2 m位のパターンにすべきなんですね。そうしないとバランスがとれませんよ。

**担当A** 学会とか講演会の会場などで大きく映す・・・あの感じですね。

**岡畑** そうです、そうです。その時にぐっカメラを引いてくれても、肝心のパターンは一応見えてる、そういう形にしないとだめですね。

**司会** その時先生は相対的に小さく映ってるんですね。

**岡畑** そうです、そうです。そうなんです。パターンを大きくすれば先程おっしゃった問題はかなり解決するんじゃないかと思います。例えばパターンを大きくすればカメラ1台でもっていけるはずなんですね。パターンのアップを撮っていて、そのあとぐっと引けばパターンのそばに先生が小さく映りますから。

**担当B** 岡畑先生が「立ち」でおやりになった番組で、細胞膜を大きく作って、そこにたんぱく質が貫通しているということを説明する場面がありましたが、この時に細胞膜の模式図を黒板に貼ってゆく先生の姿を撮ったんですが、カメラの人が「いい絵だな」って言ってくれました。これは我々にとって最高の評価ですよ。座っていては絶対にそういう「いい絵」は作れません。

**岩崎** 星先生がさっき、普通の講義をやるんだったら立ってる方が楽だけど、スタジオでは立っていると疲れるとおっしゃったのは、原因は为什么呢。

**星** 第1は動きが制限されてたってことなんですね。カメラを意識してしまいますので、どうしてもある場所で固定されてしまってるという感じですね。もう1つは、カメラに狙われてるっていうのはもうそれだけで緊張してしまうわけです。「座り」ならその緊張が上半身だけですんで、足がだらしないかっこしていてもよかったんです。「立ち」になると全身が緊張してなきゃいけない・・・それで余計に疲れたと思います。ですから、全く教室と同じような条件のもとで歩けるというか立てることができるならば、おそらく立ってる方が楽だと思います。たった1回の経験ですけどもスタジオの中で立ってるっていうのは、教室で立ってるのとかかなり、基本的に違うもんだなという印象です。

**岡畑** それは、やっぱりテレビで映されてると思うからですね。先程も言いましたが、講師をアップで映す必要は全くないと思うんです。

**星** 私なんか、足まで映っちゃって、それだけで・・・。

**仁科** 教卓の前に立つ時とそうでない時と教室でもやっぱりちょっと感覚が違いますから。

**岡畑** だから、パターンを大きくしてくれるとね、みんなはそこを見ていて自分を見てることはないと思います。そうすれば、そんなに緊張しないんです。私共もよくこういう大きなスライドなどを使いながら講演しますが、みんなはスライドを見ていて自分を見てるとは思わないので全然緊張しないんですね。ところが、1度あるときどこかのホテルでやったときに、スポットライトが当たるんです、自分に。あの時はすごく緊張しましたね。あれはホテル側の無用のサービスです。そんなことをしなくてもいいんです。みんなは講師を見にくるんじゃなくて話しの内容を聞きにくるんですから。

#### (5) 「立ちか座りか」——まとめ

**岡畑** やっぱり今回の実験は、「立ち」とは言いながら、実はかなり「座り」の要素をいれたまま実施してしまったので、混乱があったんですね。

**司会** そのとおりですね。放送大学の番組は大半が「座り」ですから、スタッフが「立ち」に慣れていないんです。本当は、実験に入る時に「立ち」に備えたいいくつかの準備や訓練が必要だったと思います。例えば、パターンの大きさもそうですし、モニターを絶えず先生の見やすいように動かす訓練も必要だったし、カメラマンにも臨機応変に対応できるような訓練が必要だったんですね。そういう準備なしに実験をやったということと、それからサンプル数が少ないということもあって、「立ち」がいいのか「座り」がいいのか、まだ結論を出すには早いのではないのかなという感じを持ちました。

**担当 A** 私としては「立ち」の方向のほうがいいんじゃないかと思っています。実は平成8年度も2つの番組をやりますが、いずれも立ちでやるつもりです。今回のいろんな経験を生かしてうまくできれば・・・と思っています。

**仁科** 今回の研究テーマとは違うんでけれども、「立ち・座り」というのは視聴者の方に直接その違いがわかりますから、学生さんからみて、どちらの方がいいのかっていう観点からの研究もしたいですね。例えば座りの方が集中して聞けるっていうこともあるかもしれないですし、先生が目の前でアイコンタクトでいるのはやっぱり気詰まりだっていうものもあるかもしれない。そういった評価もせっかく作られた番組なので、何らかの形で追跡ができるといいなと思います。

#### (6) 時間調整の問題について

**司会** 次に時間調整の問題に移ります。昨年、過去4年間に放送大学の番組に出演された先生方にアンケートを行いました。ほとんどの先生が時間調整っていいですか、時間管理っていいですか、これをプレッシャーの筆頭にあげています。

今回の実験では、時間管理からくるプレッシャーを少しは和らげるのではないのかということで、終わりが近づいたところで一旦収録を中断し、そこで残り時間の使い方などを検討しなおした上で、残りの数分を収録する方法を試みたわけです。岩崎先生はこのテストを経験されていかがでしたか。

**岩崎** やっぱりインターバルがあるってことは、後の心構えには大変役に立つと思います。決して水の流れるようにやってるわけではないですから、ちょっと区切りがいいところがあれば、そこで休みたいです。

**司会** 星先生にもやっていただきましたが、いかがでしたか。

**星** やはり、態勢の立て直しという意味では、途中で休憩時間があるのは大変ありがたかったですね。それと、もうひとつは45分なにがなんでもしゃべり続けなければいけないというのではなくて、途中で一旦立て直しをするだけの余裕があるんだと思うだけで大分気分的に救われた気がいたしました。

**司会** 今回は、「収録の中断」という形で時間調整のプレッシャーを和らげようとしたわけですが、時間調整については先生方からの具体的な要望も多いんですね。

アンケートを見ますと、ふたつあったように思います。ひとつはもっと長い時間、例えば1時間ぐらいしゃべって、その中から余分な部分をカットして時間どおりに仕上げるという形はとれないのかという要望。もうひとつは5分とか10分とか、まとまり毎に撮っていくという「ブロック撮り」ができないのか・・・そのふたつです。

**岩崎** 例えばですね、30秒しかオーバーしていないのに、半分位から撮り直しということがあったんですが、この時は、これは何とかならないのかという気が確かにしましたね。私の場合には、時間調整ばかりが頭のなかにあってですね、オーバーも大変だし、足りないのも大変だということで、すごいストレス……。だから技術的に可能であれば、たくさん撮って後で編集する方法も考えていただいたほうがいいんじゃないかと思いますね。

**司会** これは編集スタジオのキャパシティの問題が大きいですね。

**担当B** それと、もうひとつは、先生の立ち合いなしに我々が勝手に編集できるのかという問題がありますね。

**岩崎** 例えば45分の番組だったらプラスマイナス3分の範囲でしゃべれば良いということであれば、僕達にもそんなに負担じゃないですね。その2～3分のところを編集で調節することとはできないんですか。そうしたら、もっと手軽にできると思います。プラスマイナス15秒で終われとか30秒で終われって言われるとなかなか大変なんです。けれどまあ数分の余裕は大丈夫ですよということであれば、そんなに難しくはないという気がします。

**司会** 編集で時間合わせをするという考えですが、もうひとつ、番組の長さに通融をもたせるという考えもできます。放送時間は45分だとしても、41分位で終わっても構わない、残りの4分間はフィラーでつなぐんだというぐらいにアバウトに考える……。

**岡畑** 僕はそれでもいいと思うんです。生徒の立場になって考えても、ある講義は40分位で終わってもいいんじゃないんですか。今はあまりにも杓子定規というか……。

**担当B** 今でもフィラーを1分間流してるわけでしょう。それを長くすればすむわけです。

**岡畑** だから、40分から45分の間に終わるようにする。残りはフィラーを流しておく、そういう形がとれたらいいですね。

**司会** それは、可能性としてはありますね。5分は無理かもしれませんが、例えば3分ぐらいでしたら何とかなりそうですね。

**岡畑** それだけでも充分ですね。そりゃあもう、随分気が楽ですよ。

**司会** いずれにしても途中でストップすることについては、単純にその方がいいという結論かと思いますが、データではどうでしたか。

**仁科** 番組収録を時間調整のためにストップするということは効果があったという結果が出ています。

## (7) 次画面表示装置について

**司会** 次画面表示装置というのを導入したわけです。次の素材が何なのかを先生にお知らせするための装置ですが、星先生……。

**星** はい。一番問題だったのは、どっちが次画面表示装置でどっちが普通のモニターか、つまり現在映っているのがどっちで、どっちがその次に出てくる素材かっていうのが私達に

はよくわからなかったもんですから何度か慌てましたね。混乱のもとだったような気がします。

**司会** ふたつのモニターの違いをはっきりさせなければいけないということは始めからわかっていたんですが、やっぱりうまくいかなかったということなんですか。

**担当D** ひとつは、次画面のモニターを短時間の内に作らざるを得なかったということです。時間があれば、モニター装置そのものを普通のモニターとかなり違ったものに作れたと思います。ところが実験で使ったのは、かなり似てたっていうか、同じようなモニターをふたつ並べて、看板だけ変えたに過ぎなかった。それが結果的にはやはり問題だったんじゃないね。

**司会** 出演者の皆さんは、次にでる素材が何なのかというのが常に頭に引っ掛かりながら講義をされてるんじゃないのかなと、いうのが前提にあります、その辺はどうなんですか。

**岡畑** 基本的には話しの筋は自分では理解してるわけですから、次に何がくるかは気にならないんじゃないですかね。

**担当D** 全ての先生が、ストーリーをきちんと把握してから本番に入るとは言えないと思います。うっかり間違えるということもありますし……。1、2、3といくところを、順番を飛ばした先生がいますね、1、3、2とやってしまったんですね。その先生は、適当にうまくやってまたもとの話しに戻してましたけど。

**司会** 仁科さん、データではどうですか。

**仁科** サンプルは4人の先生方の分です。まだ全部データの解析が完全に終わったわけじゃないのですが、結構効果があったといえます。画面を切り換える前後30秒ずつのデータで分散をとってみたんですが、ベースラインはやはり次画面装置があるほうが低いという結果が出ています。

#### (8) 講師自身によるツール操作について

**岡畑** 私共は、サイエンスなので、必ずOHPとかそういうのがないと話しができないぐらいです。そういう時にはOHPを自分のそばに置ましてね、順番に出しながら映してやるんですね。そういうスタイルがとれると、随分講師の方の緊張も違うんじゃないんですかね。スタジオではパターンがあるといいながら、自分はノータッチで何も操作できないから、きちっと順番を覚えておかないと次に何がくるかわからない。だからそれが自分の手元にあればすごく楽になると思います。

**司会** ツール操作を講師自身がやるという発想ですね。そのひとつとして、VTRスタートボタンを先生に押していただくというテストをしました。発想は今先生がおっしゃったことなんです。

**岡畑** VTRスタートボタンを講師が押す必要があるんですか。「じゃあ次にVTRを見ましょう」って言えば、自動的にぱっとVTRが出てくればいいんじゃないですか。

**司会** ただ、何回もVTRがあるときに、「VTRお願いします」ってことを繰り返していると、視聴者の方からみるとあんまり感じがよくないと思います。それから、先生がQワー

ドを言い忘れた時にVTRが出てこないってこともありますね。副調整室のディレクターはその瞬間が近づくとかなり緊張するんです。非常に慣れた先生は適当にその回その回スタートボタンを押しやすいようなセリフを言ってくれるのでいいんですけども、そうでない場合にかなり負担なんですね。

**担当D** 講演などでスライドを使う時に、自分で自分の話しに合わせて次々にチェンジする、ああいう感じだと思っていただければいいんじゃないかと思いますね。

**岡畑** 講演会でも、「じゃ次のスライドお願いします」と言ってアシスタントの方に変えてもらう場合と、先生が立ってこうやって手をあげて合図すると自動的に変えてくれる場合と自分が操作して変える場合とがありますね。どのやり方をとってもそんなに大きな違いはないと思いますけどね。それに「次のスライドお願いします」って何回いっても、36回言ったところで、それが耳ざわりだってことはないと思うんですけどね。

#### (9) ディレクターがフロアーで指揮をとることについて

**司会** 次の項目は、ディレクターがフロアーで指揮をとるということです。今日の3人の先生は実験されませんでしたが、実験をおやりになった先生の感想ですとやはり、ディレクターがそばにいたほうがいいと言うことです。その理由としては、ひとつはディレクターがうなずいてくれるってということです。ディレクターと事前の打合せをしたわけなんでディレクターがうなずくことによって講師はすべて順調にいったるということがリアルタイムで実感できるわけです。また、困った時にその場で聞ける、つまりフロアーディレクターを介さずに直接相談できるということもあげています。

**岡畑** 確かに収録中は、ディレクターとの隔離感があります。回りはみんな知らない人ばかりで……。そういう時に様子を知ってる方がいらっしゃって、うなずいてくれたり、こんな紙に「もうちょっと長くした方がいいですよ」とか書いて示してくれると、随分気は楽ですね。

**担当C** フロアーディレクターの場合、先生に対して遠慮がございましてね。「そんな指示を私共がして失礼にならないんですか」ってというようなこともあったんですね。

**岡畑** なにかそういう雰囲気がありますね。すごく遠慮されてたり、こっちもわからんから遠慮してたり、お互いに気を使い過ぎてて……。

**担当C** 生物有機化学で小宮山先生と杉本先生が初めてだったんですけどもやっぱり私がフロアーにいて指示してくれたほうがいいという答えが明確に返ってきたんですね。

**岡畑** 逆に言うと、ディレクターは、何で見えない部屋にいたくちゃけないんですか。操作の都合上なんだろうけど……。せめて、こちらから見えるところにいらっしゃってくれとうれしいですね。

#### (10) 台本について

**司会** 今回実験をやりたかったのにできなかった項目のひとつに「台本」があります。台本にぎっしり書き込んでいらっしゃる先生とメモ程度の先生がいらっしゃるわけですけどもどちらが話しやすいのかってことです。

**担当C** 台本に関しては、一言ご報告させていただきますと、私は先生方に全部「立ち」で動いてもらったんですが、こちらから要求したわけではないのに台本を持たずに、開放された姿で動いて下さったんです。非常に結果的によかったなと思ってます。

**岡畑** 確かにそうだと思います。実際に講演するようなときは、原稿はないほうがよろしいんで、そのかわりスライドとかパネルとかがちゃんと順番に出てくるようになってればいいですね。ですから、最後にまとめをどうやってしゃべるかっていうことには苦労しましたけれども、それ以外の面ではもう台本がないほうがいいですね。

**担当A** 確かに、立ってやる場合は、たとえメモを持つ先生もいるかもしれないけど、それは箇条書きぐらいで、それできちんとやっていけるんじゃないかなって感じがしますね。座っていて、そこに書き込んだ台本があると、どうしても下ばかり見てしまいます。だからそういう点でもやっぱり「立ち」がいいですね。

**岩崎** メモ程度の台本でやる場合にはあくまでも時間に余裕がないとちょっと無理ですね。

**担当B** あまりにも先生がたくさんの情報を入れようと思うから、それで台本もきちんと書いておかなければならなくなるんです。思い切って間引いておけば、台本なしでやれると思います。

**岡畑** 例えば、学会なんかでしゃべってるときは、いらぬスライドは飛ばして次にいくとか1度出してしまっても説明もしないで「次」っていうようなこともあるわけですよ。でも放送大学の場合にはそれはだめでしょ。

**司会** いや、そんなことはないと思います。先生が自由に生き生きと話されてる場合にはそういう場合も不自然には写らないと思います。ただ、緊張してるやってる場合には、視聴者からは先生がミスをしたように思われてしまうんですね。ですから、いかに自由に生き生きと講義ができるか、ということにかかっていて、そのためにはどういう演出をしたらいいのか、先生方はどんな準備をしたらいいのかっていうことだろうと思います。

#### (11) 再び「講師バストショット」について

**岡畑** 話は違いますが、使ってる装置があまりにも旧式過ぎると思いますね。あの、パターンてのはもう随分前のものですよね。今はテレビのニュース番組でも随分新しい様々な装置を使ってますね。だから、スライドだとかOHPに代わるようなものを入れたらいいと思います。新しいものを入れなくても、今でもビデオが使える、ロータスのコンピュータグラフィックスが使える、そういうものがあるんですからもっとオーディオビジュアルということを強調したほうがいいと思うんですね。そうすれば、何度も言いましたように、講師の顔なんか写さなくてすむと思うんです。

**司会** でも、生き生きと講義をされてる先生の顔っていうのは、絵になる、訴えるものを持っていると思います。

**岡畑** ニュースキャスターとか、そういうかたは別ですが……。ニュースキャスターの場合にはその人の個性が随分ニュースに反映されるかもわかりませんが、僕らの場合は個性なんか必要じゃない。理科系の場合に大事なのはデータっていいですか、何をどういう形で理解してもらえかなんです。

**岩崎** とくにね、パネルの説明と次のパネルの説明の間があいてしまって、ただしゃべってるだけの時に、「こちらのカメラを見て下さい」と言われるのはかなりストレスですね。そんな場合には終わっちゃったパネルでもいいから映しててくれれば、それでいいわけで、講師なんか全然映さなくていいと思うんです。

**担当B** 先生以外の映像を映す時には、その映像を映す必然性がないと、やっぱり映しにくいですよ。なんでもいいって言うわけにはいかないですよ。

**担当B** それに、学生としてはどういう先生がしゃべっているかっていうのはやっぱり見ときたいんじゃないですか。

**仁科** 放送大学の場合は遠隔授業で、日頃先生とは直接のコミュニケーションがありませんので、先生がどういう人であるかっていうか、普通の大学での人間的なコミュニケーションを補うものとして講師バストショットの多用を考えたんだと思うんですね。ただそれが先生にとって負担であるっていうのはデータから非常に強く感じられます。何らかのかたちで、先生というものが伝わることは必要ですが、先生の顔のアップをすれば伝わるかという、そういうもんでもないと思いますので、何かそういった工夫ができるとういと思います。

**岡畑** すごいアップで撮られると、撮られてるという気がただけですごく緊張するんですよね。もし学生がそこにいたとしてもアップを見にくるわけじゃないです、普通はね。ごく自然に映してくれてるんだったら別になんともないんですけどね。それとすごくフォーマルな感じで撮ろうとしますよね。例えば、僕ら講義する時はポケットに手入れたりしますけれども、あのスタジオの雰囲気じゃとてもそんなことできませんよね。

**担当C** 受講生についての今までの調査で「一番ブラウン管を通して何を感じるかって」と、「親しみがない」というのが一番多いんですね。

**担当D** やっぱり、岡畑先生のおっしゃる通りだと思うんですけども、そうなった場合には映像設計に相当時間がかかります。今位の準備時間だとディレクターも講師もですね、ちょっと時間が足りなさすぎると思いますね。

**司会** それにしても、自分の顔がアップで映されることからくるストレスがいかに大きいのか、本当によくわかりました。今日は、貴重なご意見をいろいろ聞かせていただきありがとうございました。今後の番組制作に生かしてゆきたいと思います。予定の時間も過ぎましたのでこの辺で……。どうもお疲れさまでした。

(1996年3月6日実施)